

論文審査の結果の要旨

氏名：林 直樹

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

論文題名：東京東北部を中心とした首都圏東部域音調の多角的研究

審査委員：（主査） 教授 田中ゆかり

（副査） 教授 荻野 綱男 大阪大学大学院教授 郡 史郎

本学位請求論文は、東京東北部を中心とした首都圏東部域に分布するあいまいアクセントの実態に多角的に迫ろうとしたものである。さらにそのことを通じ、あいまいアクセントとは何かという大きな問題の解明につながる手がかりを得た。日本語アクセントにかんする意欲的で新しい研究となっている。

共通語化が完了したかにみえるこんにち、ほぼ 60 代以上の高年層に限られるとはいえ、首都圏内とりわけ東京 23 区内に、共通語とは異なる方言アクセント—あいまいアクセント—が分布していることを地道で着実なフィールド調査と多角的分析に基づき改めて示した本学位請求論文は、この一点に限っても学術的価値の高いものといえる。

日本語には多様な方言アクセントが存在する。全国共通語の基盤方言である東京方言や、近畿方言のように語によってアクセント型の定まったタイプである明瞭アクセント方言の他に、語による型区別をもたない無アクセント方言も存在する。無アクセント方言は、南東北から北関東域ならびに九州中部域に広く分布している。語による型区別のない方言としては、無アクセント方言の他に、語の長さ（拍数あるいは音節数）に従いアクセント型の決定される n 型アクセント方言も存在する。

あいまいアクセントとは、そのいずれとも言いがたい特徴をもつアクセントのことである。「あいまい」とは語によるアクセント型の区別が「あいまい」であることや、アクセント型そのものが「あいまい」であることに基づく命名ではあるが、各地に分布するあいまいアクセントがどのタイプに属するのか、どのような意味において「あいまい」であるのかについては、統合的な観点から深く追求されてはこなかった。あいまいアクセントの「あいまい」とは何であるのか、この部分を明かにすることは、明瞭アクセントの「明瞭」とは何かということを知ることにもつながると同時に、言語事象の中において変化しにくい部分とされるアクセントが変化するとどの部分がどのように変化することなのか、などの大きな問題の解明につながるテーマである。本学位請求論文は、以上のような大きなテーマにつながる第一歩として意義深いものである。

本学位請求論文の具体的フィールドは、東京東北部（江戸川区・葛飾区・足立区）を中心としたあいまいアクセント分布域を含む首都圏東部域である。同域があいまいアクセント分布域であることは、1940 年代に金田一春彦による一連の「埼玉特殊アクセント」研究によって知られるようになった。その後、1980 年代から 1990 年代にかけて共通語化・都市化といった観点に基づく当該域のあいまいアクセントにかんする複数の論者による論考によって、分布域内にも多様なパターンが存在し、地域差・個人差が大きいこと、高低アクセントの一種であるにもかかわらず高低差が小さいこと、おそらくそのことによって聞き取りが困難であること、しかし大きくは東京中心部的な明瞭アクセントの方向に変化しつつあることなどが指摘されてきた。一方、あいまいアクセントとは何かということについては、聴覚印象やわずかな音響分析結果とその読み取りの提示に留まり、積極的に議論されてこなかった。本研究では、首都圏東部域データに基づき、この問題に正面から取り組んだ点、高く評価できる。

また、問題の解明に際して、従来の聞き取りに基づく主観的なパターン分類や聴覚印象に基づく記述だけでなく、音響的手法に基づく分析や、パターン分類に際しては多変量解析を用いるなど客観的に事象を捉えようとした点が、本学位請求論文の眼目のひとつである。音響的指標については、「あいまい」とは何かということ、従来から指摘のあった高低差の程度を指標化したことに加え、高低ア

アクセントの重要なポイントである下がり目にかかわる「ピーク位置」を指標化し、これらふたつの観点から首都圏東部域に分布するあいまいアクセントに迫ったところが新機軸である。本学位請求論文題目が「多角的研究」である所以はここにある。ブラックボックス化しやすかった音響分析指標の取り出しプロセスなども可能な限り明示化する努力をした点も、誠実であると同時に意欲的である。

全体として、本学位請求論文は、首都圏東部的のフィールド調査に基づいたものであるため、東京式明瞭アクセントである京浜アクセントを視座とした論文となっている。将来、全国諸方言アクセント研究を視野に入れた研究に発展させるためには、異なる視点、たとえば無アクセントあるいは一型アクセント方言を視座とした捉え直しを含め、話者に提示する発話テスト文の語用論的観点からの精密化やテスト文環境の多様化、ならびに音響分析指標の命名・信頼性の再検討、対応分析のような多変量解析を用いた分析を試みるなどの課題も認められる。しかし、これらは本学位請求論文が追究したテーマのさらなる発展の礎となるもので、なんら本学位請求論文そのものの価値を減ずるものとはなっていない。

本学位請求論文は、序章・終章をおく 2 部・7 章構成となっている。なお、本論 7 章のうち、2 つの章は『日本語の研究』（日本語学会）、『計量国語学』（計量国語学会）といった全国学会学会誌の査読を通過し掲載されたもので、さらに 2 つの章は学内学会の査読を通過し、掲載されたもの（『語文』日本大学国文学会）に加筆・修正を加えたものである。1 つの章については、全国学会（日本音声学学会）における査読付き口頭発表に基づくものである。

以下、目次に従い各部各章の概要とその成果と必要に応じて問題点を指摘したい。

序章においては、あいまいアクセントにかんする先行研究を整理し、首都圏東部的をフィールドに据える根拠とともに、研究課題の提示を行った。先行研究についても十分に目配りがなされており、そのまとめと課題の抽出ならびに本学位請求論文の位置づけも適切に行われている。

第 1 部は、申請者が 2010 年に行った東京東北部アクセントのフィールド調査（面接・リスト読み上げ式調査）の結果を用いて、本人による聞き取り結果に基づき、東京東北部におけるアクセントの実態を詳細に分析・報告したものである。

第 1 章では当該地域アクセントについて、音調実態、年層、地域の 3 つの観点から分析を試みた。その結果、東京東北部全体は共通語化・東京中心部化しつつも、先行研究でも指摘のある埼玉特殊アクセント的特徴である「型のゆれ」や「金田一語類IVV類尾高型」がとくに高年層に残存する傾向を確認した。これを踏まえ、[1] 埼玉特殊アクセント的なあいまいアクセントから東京中心部的な明瞭アクセントへの変化は「同一語ゆれ」「形式ゆれ」の消失プロセスとして説明できること、[2] 地理的分布の非連続性は鉄道網の開設時期という都市化の観点から説明できることを指摘した。

第 2 章では、高年層における 2 拍名詞データに絞り、単語単独・短文に現れる音調型と型のゆれの実態報告を行った。その結果、2 拍名詞については、当該地域に分布するあいまいアクセントにおいて「文節末-2 型」という基本アクセントの影響が存在する可能性を指摘した。同時に、埼玉特殊アクセント的特徴が出現しない地域では、東京中心部における新型の獲得がみられることを指摘した。

第 3 章では、第 1 章・第 2 章で用いた指標に基づき、多変量解析のひとつであるクラスター分析による分類を行い、当該地域音調の分布状況や変化プロセスの考察を行った。その結果、「埼玉特殊アクセント的話者群」「準埼玉特殊アクセント的話者群」「準共通語・東京中心部アクセント的話者群」「共通語・東京中心部アクセント的話者群」の 4 群に分類された。それぞれの群を分化する特徴として、金田一語類IVV類短文における-2 型の出現する程度、同一語における音調のゆれの出現程度の 2 点を指摘した。この 2 つの特徴がどのように現れるのかによって、あいまいアクセントから明瞭アクセントタイプへの変化過程が説明できるという仮説を示した。

第 2 部は、2013 年 4 月～2014 年 8 月に、申請者自身が首都圏東部域において実施したフィールド調査（面接・リスト読み上げ式調査）データを用い、客観的・音響的手法に基づく当該地域アクセントの分析を行った。

第 1 章では、あいまいアクセントの客観的分析の一角を成す「あいまい性」を捉えるために用いる音響的指標の検討を行った。本章において「あいまい性」を捉えるための指標としたのは、「下降幅」「相対ピーク位置」の 2 種である。下降幅は下がり目の有無の明瞭性にかんする指標、相対ピーク位置は下がり目の位置の明瞭性に関連する指標である。これらの指標の抽出プロセスを具体的データに

基づき提示すると同時に、第2部で取り扱うデータ全体の傾向も記述した。客観的手法として音響分析は位置づけられているものの、その実データ取得プロセスはブラックボックス化している研究も少なくない。そのような中、本学位請求論文は誠実にデータ採取のプロセスを示した点、評価できる。

第2章では、前章で検討した2指標を用いて、当該地域話者を地域別・個人別に分析した。その結果、首都圏東部域話者は、東京中心部の話者よりも下降幅が小さく、相対ピーク位置が語ごとに収斂しておらず不定であることが確認された。話者ごとの指標出現傾向から、当該地域にみられるあいまいアクセントは、少なくとも3つのタイプに分類できることを示した。

第3章は、第2章の分析を踏まえ、「アクセント型の区別の程度」と「同一語におけるアクセント型のゆれの程度」といった観点からの把握を試みた。「型区別」と「型のゆれ」について、音響的指標を用いた「語間距離」「語内距離」という2種類の「距離」を求め、これを指標として検討を加えた。統合的に分析するため、2つの指標を合成し、「型区別面積」「統合語内距離」という指標を導入した。その結果、首都圏東部域話者は型区別面積が小さく、統合語内距離の個人差、すなわち個人間のゆれの度合いが激しいことがわかった。これらから、首都圏東部域は、中心部に比べ、アクセント型の区別があいまいで個人差が大きいことを示すことが確認された。

第4章では、第2部における客観的手法に基づく総合的分析を目指し、音響的指標を変数とした多変量解析の一種であるクラスター分析による首都圏東部域・東京中心部アクセントの話者分類と類型の抽出を試みた。クラスター分析の結果、当該地域アクセントは大きく「明瞭群」「不明瞭群」「不明瞭・未区分群」の3群に分類された。下降幅が「明瞭群」とその他を、相対ピーク位置が「不明瞭・未区分群」とその他の群を分ける指標となっていることがわかった。さらに、この3群の地理的分布を言語地図に落とし込み、可視化したところ、第1部の聞き取りによる分析結果と概ね重なることが確認された。聞き取りの結果に基づく分布は、第2部で示した2つの音響的指標が関与していることがわかった。つまり、あいまいアクセントの「あいまいさ」とは、従来指摘されてきた高低差の程度が小さいという「あいまいさ」だけが関与しているのではなく、ピーク位置がゆれ動くという「あいまいさ」の2方向から説明することが適切であることを提示した。そればかりではなく、この2つの尺度によって構成されるマトリックスにより、あいまいアクセントの多様性のある程度説明可能な仮説を示した点、非常に興味深い。

終章では、第1部・第2部で述べてきたことを踏まえ、アクセントの「あいまい性」・「明瞭性」の関係性を総合的に考察した。アクセントの「あいまい性」・「明瞭性」はアクセントの下がり目の幅の「明瞭性」と、下がり目の位置の「区分性」という連続する特徴により、より適切に捉えられるという結論は先にも述べた通り評価できる。最後に、本学位請求論文によって得られた知見によって、一型アクセント・無アクセントといった、その他の不明瞭アクセントの位置づけも試み、今後の課題を述べている点、意欲的なしめくりとなっている。一方、第1部・第2部の関係性についての検証、首都圏東部域以外のあいまいアクセントやn型アクセントから無アクセントまで総合的に検討するに際して、本学位請求論文で提示した2指標が有効に機能するのかなどについては、今後の研究の進展に期待するところである。また、先にも述べた通り、本学位請求論文を、全国諸方言アクセント研究を視野に入れた研究に発展させるためには、いくつかの課題も認められる。しかし、これらは本学位請求論文が追究したテーマのさらなる発展の礎となるもので、なんら本学位請求論文そのものの価値を減ずるものとはなっていないことを改めて指摘しておきたい。

いずれにしても、地道で堅実な調査と多角的分析に基づく本学位請求論文は、新しい試みや知見を多く含むものとなっており、学術的価値は非常に高い。より大きな研究テーマの萌芽も多く認められ、学位請求者の研究者として将来を大いに期待させるものともなっている。よって本学位請求論文は、博士（文学）の学位を授与される価値を十二分に有するものと認められる。

以 上

平成 27 年 5 月 21 日